

流行ニュース

＜髄膜炎菌感染症、ブルキナ・ファソ＞

厚生省は 2003年 1月 1日から 26日までに死者 196名を含む 980症例を報告した。1月 26日に Batie Kossodq Manga Tenkodogoの 4地区が警戒区域に指定された。

国立公衆衛生研究所は Nanora Paul VI Pissyの 3地区で採取された 28検体からナイセリア髄膜炎菌 (M35)の 10症例、肺炎球菌の 8症例、インフルエンザ菌 (B型) の 4症例を確認した。

厚生省は流行を抑えるための対策を実施し、医療従事者の訓練を行っている。

＜狂牛病の脅威に関して消費者が抱く 8つの疑問＞

2003年 1月 30日に WHOは牛海綿状脳症 (BSE 狂牛病) に感染した牛肉から消費者を守るために政府、消費者団体、各関連団体に向けて新たに報告書を発表した。BSEは 1986年にイギリスで最初に発生が報告され、1996年にヒトで変異型クロイツフェルト・ヤコブ病 (vCJD)が発見され BSEの流行と関連づけられた。現在汚染された牛肉及び牛製品が原因ではないかと考えられている。

BSEと vCJDには不明な点が多く、全ての疑問に対する確実な答えはまだ見つかっていないが BSE流行の発端、広がった理由、最も危険性の高い食用部分、ヒトで関連疾患が出現した理由に関しては多くのことが明らかになった。最も重要なことは、実際的な経験に裏付けられた綿密な調査により、国家が、病原物質が食物連鎖の中に入るのを防ぎ、食肉供給の安全性を確保するという一連の方法を定義できたことである。ヒトが病因物質に曝露されるのを最小限にするために、全ての適切な手段が実行されれば、牛肉及び牛肉を原料とした製品は BSEの病原物質を含まないので、ヒトに vCJDを引き起こす危険性もないと見なすことができる。

消費者が国の公衆衛生機関や獣医の権威に問う最も重要な質問の幾つかを以下に挙げる。これらの質問は BSEが発生した国ではきわめて重要であるが、長期の潜伏機期間や BSE感染製品が国際的に流通してしまった事実を考えると BSEが発生していない国にとっても重要であると言える。

・牛の餌は何か？

BSEは牛の死骸を再利用し、肉骨粉と呼ばれる蛋白質を再製し、他の牛の餌にする慣習に関係している。もし牛が反芻動物 (牛、羊、やぎ) の死骸から得られる蛋白質を与えていなければ BSEになる可能性はほとんどない。また反芻動物の蛋白質が豚や鳥にしか与えられず、製造過程において牛の餌と混ざり合うことがない場合もその国で BSEが発生する危険はほとんどないと言える。

・政府は積極的な BSE監視システムをもっているか？

最近、迅速なスクリーニングテスト導入が多く、多くの国で義務付けられ、症例発見が非常に進歩した。それにより、食品流通経路に感染牛が混入することが防がれる。

・BSE症例は海外から持ち込まれたものであるのか？それとも国内で発生したものであるのか？

生きた牛から生きた牛へ直接的に感染することはない。また海外から持ち込まれた場合では感染牛が廃棄され、死骸が食用に再利用されなければ、感染が広がることはない。問題になるのは国内で発生した場合であり、この場合その国の飼料製造過程に問題があり、他にも多くの感染牛がいることが考えられる。

・若い牛から精製された牛肉であるのか？

BSEの潜伏期間は 4~ 5年と非常に長く、その間症状が現れず、病気の終末までは組織に感染物質が認められない。生後 30ヶ月以内に屠殺された牛の肉やそれを原料とする製品であれば、vCJDを伝播する危険性は非常に少ない。

・感染する危険性の高い組織は取り除かれて廃棄されているのか？

BSEの原因物質はその動物の体内に均等に行き渡るのではなく、主に中枢神経系 (脳、脊髄) に集まる。感染する危険性の高い組織を取り除き廃棄する厳格な屠殺が実施されていれば、食の安全は確保され、国内で BSEが発生している場合でも消費者を守ることが可能である。

・屠殺場で他の牛肉への汚染を予防するには？

BSE (恐らく vCJDも) の原因物質は骨格筋組織からは検出されていない。しかし感染牛の脳 1g 以下の非常に少量の原因物質でも他の牛に感染を起こさせるに十分である。ヒトの場合、感染の原因物質の量は解明されていないが、同様に少量であると考えられている。従って、屠殺場で他の牛肉への汚染を防ぐことは極めて重要である。安全な屠殺場処理のために、感染の危険の高い牛肉と他の安全なものとの接触をなくし、廃棄することを確実にしなければならない。

・BSEを含む可能性のある牛製品は他に何か？

ワイヤーブラシや機械製の道具を用いて、骨や脊椎に付着している肉紛を機械的に骨から削ぎ落として回収するときに、感染性のある神経組織を引き抜いて他の牛肉を汚染する可能性がある。この機械的に回収された肉は加工牛製品に使用される。機械的に削ぎ落として回収された肉を通してヒトへ

の感染が起こると考える専門家もいる。神経組織を混入させない機械的削ぎ落とし技術が、特に感染の危険の高い国において、ヒトを感染から守る重要な鍵となる。

・安全な作業が厳密に規制されているか？

安全な作業を勧告するだけでは不十分である。安全な作業は、理想的には法律を通じて規制し、獣医、食品事業当局による精査を通じて管理しなければならない。

* 食の安全

現在では、その国の BSE の状態が如何なるものであっても、ある種の牛製品は安全であるという意見に、科学者は賛成する。安全であると考えられている牛製品には、牛乳・乳製品・牛皮だけから作られたゼラチンやコラーゲンが含まれる。上質の牛肉が採れる骨格筋組織から伝染性が検出されたことがない。屠殺場での混入がなければ、骨格筋の牛肉は牛乳や乳製品と同様に安全であると、多くの科学者は信じている。

流行ニュース続報： <インフルエンザ>

チェコ共和国(2003年1月25日)：プラハでの発生が報告された。A、B型ウイルスが9歳、14歳の2人の少年から分離された。この年齢集団の罹患率は増加していると報告された。両ウイルスは現在のワクチン菌種に密接に関連している。

デンマーク(2003年1月25日)¹：インフルエンザ様疾患の罹患率はシーズンの初めから予期されていたレベルより低い。1月の第4週目にA、B型ウイルスが散発的に検出された。ウイルスは現在のワクチン菌種と密接に関連している。

フィンランド(2003年1月30日)²：一月の最後の週に国中でインフルエンザの集団発生があった。主にB型ウイルスが分離され続けており、現在のワクチン(B/HongKong/330/91)と密接に関連している。以前のワクチン種であるB/Sichuan/379/99に関連した数種のウイルスが発見された。

アイスランド(2003年1月30日)²：2003年1月22日から24日に罹患した9歳と11歳の2人の少年(アメリカ合衆国から来た)からA型ウイルスが分離された。この2人が今シーズン初めて確認されたインフルエンザ患者である。

イスラエル(2003年1月25日)³：インフルエンザは1月に国中に広がり続けているが罹患率は低い。集団発生は主にB型ウイルスによるものである。

日本(2003年1月25日)²：ウイルス分離数が著しく増加した12月を除いてはインフルエンザの流行は低いレベルであった。約90%のウイルス分離はA(H3N2)型で、その内80%は現在のワクチン菌種である(A/Panama/2007/99)と密接に関連しており、残りの10%のB型ウイルスも現在のワクチンと関連している。

ノルウェー(2003年1月25日)¹：インフルエンザ様疾患の週間診察数は国中で依然として低いレベルである。これまで3人の患者のみオスロで検出された。2人はA(H3N2)型で、1人はB型であった。

ポーランド(2003年1月25日)⁴：インフルエンザ様疾患の罹患率は低く、A型インフルエンザと診断された3症例が1月に免疫蛍光検査で検出された。

ルーマニア(2003年1月25日)¹：これまでインフルエンザの流行は確認されていない。1月の第3週に臨床検査がわずかに増えたが、インフルエンザウイルスは分離、検出されていない。

ロシア共和国(2003年1月25日)⁵：Omsk市では1月の第3週にインフルエンザの流行のレベルは基準値を超えた。最後の週には幾つかの都市で流行の閾値を越えた。流行しているのはA(H3N2)型ウイルスである。A(H1N1)型とB型ウイルスが今シーズン初めより散発的症例から分離されている

スペイン(2003年1月25日)⁶：B型ウイルスによるインフルエンザの集団発生が検出されつづけており、主に子供が罹患している。集団発生は地方的で、A(H3N2)型ウイルスは1件だけ分離されたのである。

イギリス(2003年1月25日)⁷：急性呼吸器感染症の発生率は低いレベルのままである。循環しているウイルスは主にB型であり、より少ないレベルのA(H3N2)型もある。南部の学校でインフルエンザ様症疾患の発生が報告されているが、インフルエンザはまだ確認されていない。

アメリカ合衆国(2003年1月25日)¹：1月の第3週にインフルエンザの検査を30,942件実施し、陽性は950件であった。12月の第1週には2%であった陽性率が1月の第3週には11%まで上昇した。国全体ではB型ウイルスが優勢であるが9カ所のうち5ヶ所の監視地域ではA型ウイルスの方がより多く検出されている。A型ウイルスの84%はA(H1)型で、16%はA(H3N2)型であった。インフルエンザ様疾患のための医者での診察率と、肺炎及びインフルエンザによる死亡率は国全体でベースラインのままである。しかし、学校の生徒間での集団発生はいくつかの州で頻繁に報告されている。

参照：¹ No. 43, 2002, p. 364、² No. 4, 2003, p. 24、³ No. 3, 2003, p. 16、⁴ No. 42, 2002, p. 356、⁵ No. 48, 2002, p. 415

⁶ No. 50, 2002, p. 432、⁷ No. 45, 2002, p. 379

(向進吾、正井栄一、田村由美)